

東南アジアブックス

SAN SAN NWE

サンサンヌウェ

雨漏りしそうな折り畳み傘

IIKAUT HTI GALE MALONG TALONG

高松光雄訳



井村文化事業社 発行
勁草書房 発売

サンサンスウェ

雨漏りしそうな折り畳み傘

高松光雄 訳

井村文化事業社

東南アジアブックス 63

ビルマの文学 8

雨漏りしそうな折り畳み傘

1984年10月11日 第1刷印刷

1984年10月15日 第1刷発行

定価 2,200 円

著 者 サン サン ヌウェ

訳 者 高 松 光 雄

発行所 株式 井村文化事業社
会社

東京都渋谷区道玄坂2-16-3

発売所 株式 勁 草 書 房
会社

東京都文京区後楽2-23-15

振替 東京 5-175253

落丁・乱丁本はおとりかえします

製版／清水印刷 印刷／根田印刷 製本／谷島製本

0397-970907-1836

I

「さあ、ドシュウエシィンモウンさん、尋問したいことがありましたら……。」
経験豊かな裁判長が、いつもの落着いた口調で促した。

その言葉を受けた彼女は、胸をドキドキさせながらも、平静を失わぬように自分に言い聞かせて座席を立つと、裁判長に一礼した。

原告側証人の証言を打つ速記士のタイプの音以外、法廷内は、シーンと静まり返っている。全員が、検事ドシュウエシィンモウンがこれから行う尋問に、耳を傾けようとしているようだ。

マモウン(1)が法廷内を見渡すと、長椅子にやや強張って坐っている老婆が、彼女に微笑みかけた。一瞬、彼女は動揺した。

傍聴人の群れは、裁判所正面の廊下一帯のみならず、ドアの附近にまで詰め掛けている。その光景を目の当りにしたマモウンは少なからず失望した。原告側証人の女性もまた、この傍聴人に対し、困惑の表情を浮べている様子が見える。

飛散する神経を出来る限り集中させながら、マモウンは、さっと、証人の顔を見やって、

「マティターセイ、あなたのお年は十八歳でしたね。」と尋ねた。

「そうです。」その女性は、年齢には似合わず、驚くほど大胆に答えた。

化粧品を色どりと濃く塗りたてた顔を心持ち上に向け、目じりをつり上げた顔つきには挑戦的な表情

が見られ、羞恥心のかけらさえない。

「被告のドアマーさんのことを以前からご存知なんですか……。」

「ええ、約一年程前から親しくしております。」

ティターセイン⁽²⁾はそう答えながら被告を振り返り、微笑み掛けた。

マモウンはその記録がタイプされるのを待ち、更に、引き続き質問を投げ掛けた。

「シュウエナガー・ホテルを警察が検挙した際、マティターセインが居たとの証言がありますが、その夜、あなたはホテルにはいらっしゃいましたか。」

「行きました。以前からマー婆さん⁽³⁾に頼まれて行っていたんです。」

その答えを聞き、マモウンは思わず微笑んでいた。

彼女は、若さに任せ、てきばきと証言するが、裁判に出た経験も少なく、更に、被告との関係が親密であったことを大胆に証言することが、犯罪そのものを明かしているのだということに、気の毒にも気づいていないようである。

「さあ、書記さん、明確に記録して下さいね。以前から時々来たことがあるんですって、いいですか。マーお婆さんに頼まれて来ていたんですって、いいですね。」

マモウンは、法廷で勝算を掴み始めて興奮していた。

「もう少し冷静に尋問願います。ドシュウエシンモウンさん。……それから、今の証言記録をはっきりとして置いて下さい。このタイプライターは、国有化した時の物で、本当に旧式のものでね、相当に気をつけて使っているんですよ。」と裁判長は注意を促した。

一字ずつコチ／＼と打ち続けるタイプライターの音は、待つ者にとって気の遠くなるほどゆっくり

としていて、長い時の流れを感じさせた。

質問の間を長く開けることは、この場合不利になると考えて、

「警察が逮捕した夜、シュウエナガー・ホテルにあなたが来ていたのは、被告の依頼によるものですか。」と尋ねた。

「そうです。仕事が出来たので来るようにと言われ、行きました。」

裁判所の廊下で、傍聴人はわかにざわめき、そわそわとし始めた。

そんな中で、原告側証人の厚化粧の顔はさらに顎を突き出している。マモウンのみが、人知れず、胸の高鳴る鼓動を押えていた。

「仕事が出来たとは、どういう意味の事なのですか。」

ティターセインは、緑色のアイシャドーを塗りたてた臉を盛りあがらせながら、長い付け睫毛の目を細め、不敵な笑いを浮べた。

「それはね、シュウエナガー・ホテルに行くと、外国人が待っていて、その中のギリシャ人の客二人と、私が一緒に寝るということですよ。」

法廷内には、期せずしてドツと笑い声が上がった。その瞬間、マモウンは周囲の映像がぼんやりと遠のき、軽い目まいに似たものを感じた。我を失うまいと心を律してはいるが、目の置場がない程その雰囲気は彼女を居づらいものにした。

裁判長はその場を察し、証人の証言を記録するため間に入って、話を引き継いだ。

「その夜、シュウエナガー・ホテルへ私が行った。そして、外国人の客と会って話をした。その客の中からギリシャ人の船員と、私の知っている……『そうでしたね。マティターセインさん。』……そ

う、ギリシャ人の船員と私の知っている外国人の客二人と、私が一緒に寝て仕事を済ました。……という事です。さあ、ドシュウエシィンモウンさん、引き続き尋問して下さい。」

その間、傍聴人の間から起った低いどよめきを聞きながら、マモウンの頬は太陽が燃えるように、赤く焼け火照っていた。

「恥しい……。」何とも説明の着かない気持が心の中を駆け巡っている。時が蜃気楼のように遠く霞んでゆく……。もし、許されるのなら、足もとの地面が割れて、このまま飲み込まれてしまいたいとさえマモウンは思った。

そんな雰囲気の中で、鈍く重々しいタイプライターの音が、やっとひと区切りを告げ、新しい、次のページを打ち始めようとしている。

II

マモウンの胸に、様々の思いが去来し、その波紋は大きなうねりとなって彼女を覆っていった。――法廷でのマモウンの真面目な検事ぶりは、もうすっかり板についていたが、今度の事件に関しては、これまで滅多に経験したことのない震えを覚えた。世間に、「病人を診る勇氣のない医者。証言を聞く勇氣のない裁判官」という言葉があるが、実際、今度の事件は相当やっかいな問題をも含んでいるようだ。

マモウンが、この郡裁判所で第四級法律家として務め始めてから、六ヵ月余りが過ぎていた。その間、窃盜、強奪、賭博、売春、などの輕犯罪、そして強盜、殺人、暴行といった犯罪を手懸け、百件以上もの事件を経験していた。

女性法律家にとって、刑法第三七六条に係わる事件は、必ず取り扱わねばならない問題である。第一回目の事件の時は、尋問の折赤面してしまったものが、回を重ねるうちに自然と場馴れし、その尋問ぶりも、臨機応変な柔軟性を發揮していた。どのような難問であっても、きびきびと押し進める術も身につiki、裁判官との関係もうまく行っていた。

したがって、彼女にとって、この裁判所は決して居心地の悪い所ではなかった。

裁判長も、

「君自身も、自分が女性だという事を忘れ去り、我々のことを他人と思わずに同じ職場仲間と思ひなさい。遣りたい事は遣り、言いたい事があればはっきりと言いなさい。たとえ、それが誤っても逃げようと思つてはいけない。我々は下層階級の出身だし、また、我々の徳とするところは、お互いの同情心、誠実な行為、そして、国家民族を發展、繁榮させたいと願う誠意以外にはないんだ。だから我々は、お互いに憚り合うことなく、この仕事を遣つて行こうじゃないか。」と勵ましてくれたし、仕事を通じその人柄に接する内に、言動の一致した人物である事が、マモウンにも分つて来た。

だから、この裁判所で彼女は気持ちよく仕事が出来たし、職場に喜びを感じていた。
一人の法律家として、裁判官の性格を知っている事も、この裁判所で彼女が勇敢に振舞ひ得た理由の一つだった。

正しい審理を可及的速やかに終了させるためには、一人一人の協力と団結の力が、不可欠な条件となつてゐる。

今のマモウンにとって、天からの何びとであれ、どのような事件のプロローグ、不法な証人も問題ではないが、今度の事件には身の震えを覚えたのだった。また、これが、どうして震憾せずにおられるのか……。

既にこの事件は国の津々浦々にまで知れ渡り、被告も、また、有力者である。

本件犯罪に適用される条項には、売春取締法第五条第一項、第七条第一項C(d)、第八条(a)がある。俗に言うと、被告が売春婦の財の一部に依存し、生計を立てていること、売春婦を家に囲つていた等の嫌疑である。

被告は、国内のみならず、遠く外国でも知られている有名なシュウエナガー・ホテルのドアマーで

ある。

ホテルは、インヤー・レーク湖の斜めに、ちょうど人の頸を乗せた格好で、そのほぼ半分程を湖に突き出して建てられていた。

このホテルの所有者である彼女が、世界のいたる所でその名を馳せている事も事実だ。

原告の証人である第一警察署長の証言によれば、

「事件発生の夜、シュウエナガー・ホテルの情報が入ったので行つて調べてみたところ、小さな寢室のベッドの下に数人、天井に数人と、裸体に近い状態で隠れていた女性六人を、外国人の船員八名及び外人観光客二名と共に目撃した。」とのことであつた。

シュウエナガー・ドアマーを逮捕し、ホテルを閉鎖した翌日の各新聞は、この事件を大々的に報じていた。

何よりも、多数の人間が聞いて知つてゐるという事は、このニュースが、如何に有名であつたかを物語っている。

「起訴」当日――。裁判所の中の庭は、開廷前から、シュウエナガー・ドアマーを一目見たいと詰めかけた傍聴人達の群れで、ごった返していた。

その時、裁判所の廊下で押し合いひしめき合つてゐる人の群を掻き分ける様にして通り抜けて行つたマモウンは、この傍聴人達の方がこの事について彼女よりはるかに豊富な知識を持つてゐるのに驚かされた。

「世界的に知れ渡つたマゝ婆さんだよ。我々ビルマ人の船員が外国の港に着くと、向こうさんの常連が尋ねるんだつてよ。マゝ婆さんは未だ居るか……。元気で遣つてゐるんだろうなつて、種々聞くん

だつてよ。」

「売春宿の女将だからって、見下げたもんじゃないのよ、あなた。彼女の財産ときたら、シュウエナガー・ホテル一軒ではなくて、街の中でも宿泊所を經營しているんだって、ほら、『マラー』とか『タマー』っていうのは、マー婆さんの所有物だそうよ。」

「見てて御覧。この件は最後にはきつと尻窄みしてしまうんだから。間違いないよ。郡裁判所のレベルじゃ、マー婆さんを敢えて投獄するようなことはしやしない。遣るとしても罰金ぐらいよ。いつの時代にも、権力者の目をかすめ、上手に歩いて来たマー婆さんだ。今も婆さんが抱えている袋の中には奴さん連中を説き伏せるような物が入っているよ。待っててみて御覧ぜよ。」

傍聴人達のそんな囁きは、合法的なものではなかったが、マモウンの心に、なぜかさざめく不安の波が押し寄せた。

「嗚呼、神様、私を助けて、どうぞ私に天の力を与えて下さい。」

事実その女性は、人々の口の端に上るほど、種々の悪行を犯していることで有名であつた。

起訴されているこの事件は、証人による歴とした証拠が充分にあると推測されている。また、時を同じくして、彼女に関するその他の悪行のすべてを、一つの方策でもってきっぱりと抑え込んでいたことも事実だ。

が、しかし、『原則』というものは、人がひと度それを破ればもはや維持され得るものではない。

こうした破壊者のために計画が崩れ去つた有名な実例を、多くの人々が知っている。もし、過去十五年間の新聞を一ページづつ捲つて見るならば、そこに存在する「法を遵守する人を法が保護し、法を愛する人は榮華繁榮を極め、法を憎む人は榮華繁榮を失う。なんびとも法を殺さば、その人を死滅

の法が亡ぼす」という因果の法則に気づかないはずはない。

この言葉を常に思い、肝に銘じて来たマモウンでさえ、今は、動揺を来たし始めている。

法廷に立った時、話すべき言葉が容易に見つからなかった。

ドアマーは、年の頃六十歳前後で、自分自身の母親か祖母と同じ位の年齢と思われる。

老齡の相を呈しながら、もはや浮世の経験に麻痺して、何のたじろぎも見せないその表情——。マモウンはただ驚き、じっとその顔を見詰めた。

ドアマーには付き添い、及び保証人が控えている。また、被告の弁護士として委任された人物の姿も見うけられた。それはICS(4)のウソウミン、ウマウンマウンチョーといった切れ者ぞろいの弁護士である。

こうした最高の弁護士達と向い合っていると、マモウンは何となく心許なくなつて来たが、検事としての威厳を失わないように努めた。

被告側から出された保釈申請問題について、彼女の側からは、取り立てて発言はしなかった。

その理由は、保釈に関する条項の適用が可能であったこと、また、被告が老人であり健康を損なっているということが関係医師による健康診断書として、保釈申請書に添えて提出されていたことによる。

マモウン自身も、このような女性を拘置所に置くことにためらいがあった。

他の女性達と一緒に拘留した場合、彼女の持つ影響力が、彼女達に及ぼす危険性を恐れた為によるものだった。

拘置中の、懲役中の若い女性というものは、意気消沈しているものであり、彼女達を抱き込むこと

は容易なことである。

聞くとところによれば、このマー婆さんは人を引きつける魔性の魅力を持つという。

この件に関しマモウンは、胡麻一粒では油にならないとしても、微力ながら、若きに燃える女性の一人として、この種の問題と取組む際は、法律的な観点は勿論のこと、社会的な面も考慮に入れて判断することにしていた。

したがって、被告の保釈申請に対し、彼女は特に反対はしなかった。

彼女よりはるかに経験豊かな被告の弁護人の面前で、保釈申請に関する自らの考えや教養の程を、長々と述べたてる勇氣もなかったし、また披瀝する必要がないと判断した。

時期としても、今、その事を詮議することはふさわしくもなかったので、

「異存はありません。」とのみ簡単に答えた。

マー婆さんをその日保釈し、この事件の審理を二週間後に行うことを決めて閉廷となったが、その後思いも掛けない問題が生じた。

マモウンが検事控室に引き上げる途中、廊下への渡り場付近で、彼女に付き添うように、見知らぬ二人の男が歩いて来た。

顔に意にそわぬ慇懃な微笑みを浮べ、突然、「マー婆さんが、先生の恩は一生忘れない。この恩義は受けておく伝えて欲しいとのことでしたので、お伝えしておきますよ。」と言った。

彼女は初め、彼らの言っている意味が理解できず、自分を取り囲む多くの鋭い詮索の目の中に行んでいた。

別れ際に彼らは、「それじゃ、失礼します。後ほど先生には、別途、お目に掛かりたいと思ってま

す。先生のお宅か、或はどこかで……。」と言った。

その瞬間、マモウンは、彼らの言う意味を初めて理解できた。しかし、彼女が何か言い返そうとした時、既に、彼らの姿はその場にはなかった。

彼らは、我が意を得たかのように、落着き払った表情で立ち去っていったのだった。

残されたマモウンは恥しさと怒りが同時に込みあげ、耳たぶや鼻面が上気して赤くなり、こめかみや耳元に血がドッドドと踊り上がって来るのを覚えた。

茫然と佇み、周囲の物は何も見えず、また敢えて見ようとはしなかった。

検事に対し、被告が感謝するとはどういうことだ、と彼女は思った。また、恩は一生忘れない、恩義は受けておく、別途に会いたいとは……。

公正・誠実・誠意・真実、という言葉を容易に理解し得ないとは一体どういう階層の人間だろうか……。すべての物事を都合の良い方に取り違えて、金銭の量で押し測ろうとしている。

彼らの目には、被告の保釈申請に対し、強いて反対しなかったマモウンの行動が何か下心ありげに映り、別の意味に解釈している。

結果——彼女にある種の駆け引きの意図を持って近づいて来たと思われる。

マモウンは気が狂ったように検事控室に入り、やみくもに一冊のファイルをポーンと、机の上に投げ出した。

無遠慮に仕切りの戸を押し開け、考え事をしていた彼女のもとに、裁判官連中が小走りに入ってきた。

「おい、おいマモウンよ。今、君の事をちょうど話そうとしてたところなんだがね。」と彼らの一人

が言った。

見れば、コーチョーソーオウの顔もそこにある。彼女は先程の出来事の子細を胸に収めておきたくなかったのだ、裁判官連中の前で、おおっぴらに明かしてやろうと思っていたのだが、彼の出現ですべて無駄になってしまった。

長距離走者のごとく息を切らせ、近くの椅子に体を投げかけるように坐ったコーチョーソーオウは、何となく薄弱な笑いを浮べ、通り一辺の挨拶をした。

「さあ、続けて話して頂戴。私の事について……。」

三人の裁判官が、意味ありげな目つきでマモウンを見遣っているのに、彼女自身気付いていた。

「おお、今回は検事が、この被告には、相当手控えているんじゃないかと驚いているんだよ。」

「何ですって。」

予期せぬその唐突な言葉に、マモウンは咄嗟に何と答えればよいのか返す言葉を失った。

少なからず、こんな事態に直面することの予想はついていたが、頭の頂にまで血がのぼり熱くなるのを感じた。

コーチョーソーオウの、生来落着きのないそわそわした態度が一層、彼女をいらだたせた。

椅子をゆすり、指先でコツコツと机を叩く仕種はタイプでも打つかのようであり、相手を全く無視し、また、からかっているようにも思える振舞いを見せている。

そして、「先程、ドアマーの手下と君が話し合っているのを見かけたんだがね。」とふいに言った。

「何ですって。」

眉をつり上げ、人を小莫迦にしたような笑いを浮べている彼の顔に、思いきり平手打ちをくわせた

い衝動にかられ、マモウンは、その怒りを奥深く飲み込むように自らを制しながら、ただじっとチヨソーオウを睨み付けた。

「あなたは一体、何をおっしゃりたいの。」彼女の声が、室中に大きく鳴り響いた。

彼女の怒りを十分に知っているはずのコーチョソーオウは、

「何も、まだ言っていないじゃないか。」としらじらしい顔付きで言った。

「とぼけないでよ、コーチョソーオウ。言いたい事があるのならはっきりと言って頂戴。あなたのおっしゃりたい事なら、私知っているわ。何ですって、ドアマーの保釈の件について何だって言うの。裁判所が許可した事じゃないの。裁判所の決定に、あなた一体どんな理由でけちを付け、侮辱するのよ。」

突然、彼の顔色が変わった。出端を挫かれ、放漫な面持ちで裁判官を見遣りながら、言葉を繕った。「マモウンよ、いくら検事で弁がたつからといって、矛先をこちらに向けるなよ。俺が言ってるのは、裁判所の決定の事じゃないんだ。君のとった行動を言っているんだ。どうしてだい。政府と相対するような被告に、検事自ら保釈の件につき、何の反対もしなかったとはよ。」

「ちょっと、コーチョソーオウ」

マモウンの声は前にも増して一層鋭く鳴り響いた。

「あなたは一体何なの、特別な権限でも持った特高なの。これは私の問題よ、あなたとは全く関係のない法律問題よ。それなのにどうして、関係のないあなたが首を突っ込みたがるの。誰があなたにそうした任務を与えたのか、その証拠でも見せて頂戴よ。その特高証というものを……。」

その時、椅子の背凭に身を委ねて揺り動かしていたチヨソーオウが、突然体を起こした。もとも

と浅黒いその顔は翳りを帯びて一層黒く光って来た。

「誰の命令がなからうが、俺には知る権利があるんだ。これでも一人の国民だぜ。君達は公務員だ。公務員一人一人の行動に対し、国民のすべてが知る権利、批評する権利、そして関係当局にその情報を送る権利を有する事を、君は検事を遣っていないが知らないのか……。」

「へえ、コーチョーソーオウ」とマモウンは、憤懣遣方ない気持を押え、軽く笑い捨てた。

裁判長は、静かに落着いた様子で葉巻を燻らせながら、コーソーオウをじっと見つめていた。

他の裁判官二人は、もはや品格もどこへやら、大声で笑いたてていた。

笑い事だ。しかしコーソーオウという人物も、また面白い存在の生き物だ。

だが、この種の生き物がいつの時代にも危険であり、知らぬ間に大きな影響力を及ぼす。知らずにいると、この種の厄介な先生方は、あれやこれやと、四方八方あらゆる場所に首を突っ込み、物事を掻き回すのには驚かされる。

何か重要な任務を遂行する人の如く、いかにも重大そうに、物事に対していつも複雑な顔つきで、党支部事務所、人民評議会事務所に、コーソーオウは、国政調査記念徽章を施した緑色の手さげ袋をぶらぶらさげて、毎日うろろしている。

協同組合店、地区関係の宗教問題を始め、祭事など人の賑わう場所には必ず彼の顔があった。大人は言うまでもなく子供達でさえ彼のことを知っていた。

彼の顔をちらっとでも見た者は、誰でも、少なからず心に煩いが生じ、また、その生活が脅かされた。

マモウンもこの地区にやって来た当初は、何も分らないままに、彼と普通に接して驚いたものだっ